

## ヨハネによる福音書 I 章 I~5、9~14、16~18 節

### 「クリスマスの悲しみ」

オスカー・ワイルド

1854~1900 年

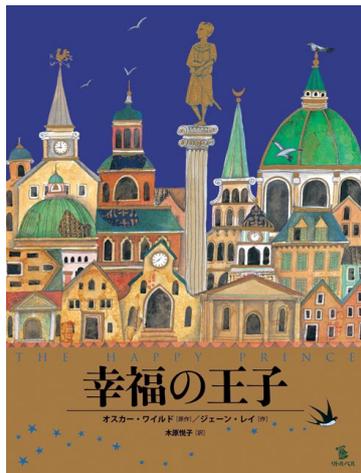
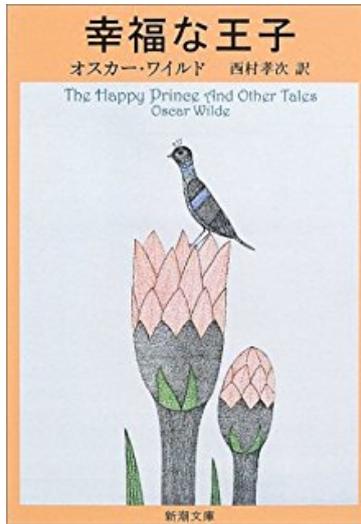
イギリス（現・アイルランド）出身の作家、詩人

19 世紀末の文学界を代表する一人

多彩な作品を著わした

ある町の空高く、丸く高い台の上に「幸福な王子」の大きな像が立っていました。それは生前、憂いの一つもない「無憂宮」と呼ばれる宮殿に住み、涙も悲しみも知らずに、外の世界の悲惨や痛みのこれっぽっちも知ることなく生きた一人の本当に幸せな王子の全身を黄金で覆われた記念の像でした。ですから、人々は王子のことを「幸福な王子」と呼んでいました。ところが、冬間近のある寒い夜、渡りに遅れた一羽のツバメが羽休みのために王子の足もとにちょっと立ち寄ったことから、物語が始まります。それは、幸福な王子の、幸福とは正反対の「悲しみの物語」の始まりでした。

ツバメは、疲れた羽をちょっと休めようと、王子の足もとに立ち寄りました。雲一つない、星の輝く夜でした。「金の寝床ときてらぁ」。ツバメは辺りを見回しながら、そっと独り言を言いました。が、翼の下に頭を入れようとした、ちょうどその時です。雲一つないはずの空から 大粒の滴が一つ、ポツンと



ツバメの頭に落ちてきたのです。「こいつは妙だ。空には、雲なんか一つもない。星がキラキラ輝いている。なのに、雨が降ってくるなんて」。ツバメは不思議に思いました。しかし、怪訝に思っていると、すぐにまた、もう一滴落ちてきます。「おいおい、雨も防げないじゃ、どんなに立派だって何の役に立ってというんだい。煙突管のいいのでも探してこなくちゃ」。ツバメはそう言って、飛び立とうとしました。ところがところが、翼を広げるか広げないうちに、なんとまたしても滴が落ちてきたのです。3度目です。のんきなツバメもさすがに、目を凝らして上を見詰めました。すると、そこにあったのは驚くような光景でした。ツバメはいったい、何を見たのでしょうか。目に涙をいっぱい溜めた幸福な王子の姿でした。涙を流して、悲しみに心を痛めている王子の姿でした。涙が黄金の頬をつたって流れていました。ツバメの頭に落ちてきた滴はなんと、王子の涙だったのです。

王子は、町の様子を隅から隅まで見渡せる高いところに生まれて初めて立ちました。そしてそのとき、それまで全く知ることのなかった「人々の悲しみ」というものを目にして、その悲しみに涙したのです。初めて見たのは、貧しい一軒家で深い悲しみに耐えている親子でした。貧しさですっかり痩せ衰えてしまった母親と、病気に苦しむその男の子。ふたりは必死に悲しみに耐えていました。その光景を目にして、幸福な王子はいたたまれなくなりました。そこで、王子はツバメに言います。「お願いがあるんだ。一晩、僕のところに泊まって、僕の使いになってくれないだろうか。男の子はひどくのどが渴いているし、母親もとっても悲しそうだから」。そう

言って、ツバメに頼んで、自分が手にしていた剣の柄のルビーをふたりのところに届けてもらいました。

一方、町外れの屋根裏部屋には若い脚本書きがいました。お金を手にすることができず、貧しさのなか、空腹と寒さで震えていました。王子は再び、心を締めつけられるような悲しみを憶えます。そして今度は、片方の目からサファイアを取り出して、ツバメに届けてもらうのでした。

さらには、広場でマッチを売っている女の子の姿が王子の目に入りました。女の子は途方にくれていました。売り物のマッチを間違えて、水溜まりに落としてしまったのです。お金を持って家に帰らなければ、お父さんに殴られます。その姿を目にして、王子はツバメの反対にもかかわらず、残されたもう一方の目まで女の子にあげてしまいます。王子は今や、目が全く見えなくなってしまいました。

が それでも、王子はなお、町の人々の悲しみが心を捉えて放しません。王子はなおも、ツバメに頼んで、町の様子を見にいらしてもらいます。そして、その様子を知ります。町は、金持ちたちの浮かれ騒ぐ姿と、その一方で ひたすら寒さと悲しみに耐える貧しい人々の姿とで満ちている。王子はそのあり様を聞いてついに、自分の体を覆っている純金の箔を貧しい人たちに届けてくれるようにと、ツバメに頼むのでした。とうとう、幸福な王子はなんともみすばらしい「哀れな王子」に変わってしまいました。そればかりか、王子のために一日、二日と渡りを遅らせたツバメもまた、やってきた冬の雪と霜の寒さにやられ、ついに王子の足もとに落ちて死んでしまうのでした。そのとき、王子の鉛の心臓がパシッと音を立てて、真っ二つに裂けました。





宝物をもらった人々は大喜びでした。でも、王子の悲しみなど、露も知らずにいた。それを知っていたのは、ただ王子自身と 王子の手伝いをしたツバメだけでした。町の人々は誰一人として、王子の悲しみなど知らずにいました。そんななか、大切な何かを語りかけるように、ツバメの口から、心に響く言葉が語られます。それは、ツバメが何の気もなしにフッと呟いた一言でした。人々のもとに王子の宝物を届けて帰ったそのとき、ツバメはこう呟いたのでした。「変だなあ。ひどく寒いっていうのに、僕は今、とっても温かいんだ」

町の人々は、みすぼらしくなった王子の像を嘲って笑いました。そして ついに、王子は炉の中で溶かされ、ツバメはゴミ捨て場に投げ捨てられてしまいました。

神様が一人の天使に「この町の中にあるもので一番尊いものを 2 つ、この私のもとに持ってくるように」とおっしゃいました。すると、天使は溶かされなかった王子の鉛の心臓とツバメの亡骸とを持って、神様のもとに戻ってきたのでした。そのとき、神様はこう言われました。「おまえは、間違いなく選んできた。この小鳥には、私の楽園の庭でとこしえに美しい歌を奏でさせよう。そして、この王子には、私の黄金の町でとこしえに私を讃えさせよう。そう、私は心に決めていたのだ」

(新潮文庫版「幸福な王子」要約)



幼いときのこと、ロバートはある夜、家のベランダに出て、年老いた一人の老人が街のガス灯に一つまた一つと、火を灯していくのを眺めていました。真っ暗な、真っ暗な夜の街の通りに、遠くの方から、ガス灯の火が一つずつ灯されてきます。ガス灯の火は、ロバートのいるベランダの方にしだいに近づいてきます。と そのとき、ロバートは突然、家の中に飛び込んで、母親に向かって大声で叫んだのでした。「ママ、ママ、見て、あのおじさんを。あのおじさんを見て！ 真っ暗な夜に、穴を開けてるんだ」

(ロバートの思い出。イギリス・スコットランド)



ラ・トゥール  
「聖誕」

クリスティナ・ロセッティ

1830～1894年

イギリスの詩人

敬虔な信仰者で、多くの宗教

詩を遺す

何をあげたらいいのでしょうか。

私はとっても貧しくて、

羊飼いなら 小羊があるし、

博士さまなら 献げるものは決まってる。

でも、私だけにできること、

私の心を献げます。

キリスト、ベツレヘムにあれ給うこと

千度に及ぶとも、

キリスト、汝が心の内にあれ給わずば、

魂はなお 打ち捨てられてあり。

アンゲルス・シレジウス

1624～1677年

17世紀ドイツを代表する宗教

詩人

簡潔な言葉で、深く美しい瞑想的信仰をうたった

マルティン・ルター

1483～1546年

元・カトリックの修道士、神学者

宗教改革の中心人物で、プロテスタント教会誕生のきっかけをつくった

ああ、愛するイエス、聖なる御子。  
汝れのため、我が内に聖き優しき伏せ所をつくらせ給え。  
願わくは、汝れの静けき寢床とならんことを。  
我が心、喜びあまりて躍らん。  
我が唇、喜びあまりて、もはや抑えるを得じ。  
我もまた、喜ばしき声あげ、<sup>いにしえ</sup>古の上なく美しきかの子守り唄、  
御使いの讚美に合わせん。  
「いと高き所には栄光、御子を賜いし神<sup>たま</sup>にあれ。  
地には喜び、新しき年にあれ」



すべての人を照すまことの光があって、世にきた。

(ヨハネによる福音書 1章9節。口語訳)

光は暗闇の中で輝いている。

暗闇は光を理解しなかった。(新共同訳)

そして、やみはこれに勝たなかった。(口語訳)

<sup>しか</sup>而して <sup>くらき</sup>暗黒は <sup>これ</sup>之を悟らざりき。(文語訳)

(ヨハネによる福音書 1章5節)

<sup>ことば</sup>言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

(ヨハネによる福音書 1章10～11節)